

「思いつめる 教育について 前提として」

谷川俊太郎

「思いつめる」

思いつめるとは、どういうことなのだろう。思いつめた顔には、たしかに一種の美しさがある。ただひとつのことに、自分の全存在を注ぎこんでいる者の、一生懸命な美しさ、夢中の美しさなのだが、その美しさは、たとえば仕事やスポーツや勉強に打ちこんでいるときの美しさとはちがって、明るくない。いわば追いつめられたものの美しさなのであって、もう進むべき方向が見つかからないというところに、ある悲劇的なものが感ぜられ、当人はそんなことに気づいていないからこそ、それが他人には美しく思えるのである。

しかし同時に、思いつめた顔には一種のみにくさもある。それはおそらく思いつめた人間の、そのいわば手づまりの状態、静止してしまっただけで動いてゆけない状態から来るものだろうと思う。つまり思いつめた人間は、ある意味では固定観念にとらわれていて、自由を失っているのだともいえよう。当人はそういう状態に苦しみぬき、時には自分の生命さえ賭けているのだが、それにもかかわらず、そこには時に愚かしさすら感ぜられ、他人は冷酷にもむしろおかしきみをおぼえることもあるのだ。

そういうつまった状態には、人間はできるだけはいりこまぬほうが望ましいし、そんなにせっぱつまってしまうことは、一生のうちそう何度もないことだろうが、それでも人間にとって、何かを思いつめることは大切だし、必要だと思う。なぜなら本当は、そういう形でしか人間は生きた思想をつかんでゆくことはできぬはずだからである。

思うという行為は、考えるという行為に比べて、より感情的であり、より不正確である。物

思いという言葉にも表われているように、それは時には余りにも漠然としていて、まるで自分を甘やかしているようにもとれることがある。けれどまたそれ故にこそ、思うことは考えるということに比べて、よりいっそう未分化であり、人間のより多く部分をその中にまきこむ。

考えるのが主として理性の働きであるとすれば、思うのはおそらくまず感ずるということにその基礎を置いている。考えることは時に現実を離れて抽象的な理性の遊びに墮するが、思うことの墮落はもっと肉体的な自己陶醉に向かう。

が、こういう風に、思うと考えるを分けてみても、実際にはこのふたつの心の働きは、つねに互いに補いあつてひとつなのである。思ったことを考えることでより精密化し、考えたことをもういちど思つてみることで、より全体的にすることを、無意識のうちに私たちはくり返している。思いが誤っていることもあるし、考えが間違っていることもあるのだが、この微妙なチェンジ・オブ・ペースが、私たちの頭を柔軟にしていることはたしかである。

そうしてみると、思いつめるという状態も、それがどんなに切実なものであれ、絶対的な終点ではあり得ない。思いつめたその先に、まだ何かがあるはずで、思いつめた自分をもういちど角度を変えて考えてみることで、その状態の破れる可能性があるのだ。思いつめた状態はともすればヒステリックになりがちだから、それを打ち破ることは容易ではないし、その思いつめかたの先にはもう、ぎりぎりの決断とそれに伴う行為しかないという場合もあろう。けれどもそれでもなお、人間は考えることはできるのであり、それは決して行動からの逃避ではない。

思いつめてきたその論理と感情の複合が、なまはんかのことで変わるものではないとしたら、その思いつめの出発点となった自分の発想そのものを、もういちど検討してみる必要はないだろうか。どんな思考もそういうことの繰り返しなのではないだろうか。振り子のようなそのダイナミズムなしで、人間の魂の自由はあり得ない。本当に大切なのは疑うことではなく、信ずることなのだが、ひとつの信に達するためには、どんなに疑つてもいいのだと私は考えている。

というのも、近頃は出来あいの思想がはびこっていて、ひとつのことを自分にひきつけて思いつめ、考えぬくという習慣がますます少なくなっているからである。

思想という言葉がふたつの（おもう）の積み重ねでできているのはおもしろい。私には、時にそれが思いつめることそのものように思えることがある。今の平和な日本では一見、思想には命がかかっていないかのように見える。だが本当の思想には、それがどんな日常性の中にあれ、命がかけられているのである。

たとえば、いわゆるマイホーム主義にしたところで、それを自分の思想にするためには、権力に抗して妻子を守る覚悟が必要なのはいうまでもない。マイホーム主義もいったん思いつめたら、どんな危険思想になるかわかったものではないのだ。

（一九六九）

「教育について」

I

教育という言葉ほど私をうろたえさせる言葉はない。人間が人間を教育するという行為の中に私が先ず感ずるものは恐怖であり、私にとっては教育と暴力とは、どこか奥深いところにつながっている。こういう不合理な偏見の如きものを私が抱くようになったのも、私の受けた教育のせいだと思われるのだが、そう考えるとますます私は恐しく、しどろもどろになるばかりである。

人間は頼りない動物であると思う。そのもともとは結局ひとかたまりの粘土にすぎないのであって、それをこねる者の意志ひとつでどんな形にでもなってしまう。人を食えと教えられれば、人間は人間を食うだろうし、人を殺せと命じられれば、人間は人を殺す。要するに、人間は人間として生れはしないのである。人間は本能のみを継承した一匹の畜生として生れるのだ。

その畜生を人間にするのが教育であるとすれば、教育ほどすばらしいものはないし、同時に教育ほど恐しいものもないのである。

どういふ人間に教え育てるかというそのイメージは、時代により、社会によって異なるが、教育が支配のひとつの形態であることに変わりはない。より年長の一集団が、その集団のエゴイズムに従って、他のより年少の集団を自らの後継者たるべく教育するのであって、教育者の愛のなんのと言ったって、教育全体の巨大な政治的働きに比べれば、感傷にすぎぬとも言えるだろう。

だが、その時代において支配的な文明・文化の型から自由ではないのが人間存在である。集団生活を送ろうと思えば、その型を自らにおいてひきうけ、それを継承することなしに人間は生き得ない。

しかし、人間の面白いところは、そういう主流の線に沿って教育されながらも、想像力の働きのよって、もっと他の生きかたというものをイメージし得るといふ点にある。そしてそういう能力を育てるのもまた、教育というものの力なのであるかもしれない。

私はひとりっ子に育ったせいとか、学校がだいきらいで、従って教育なるものをもつばら苦痛を伴った形で受けてきたように思う。だがそういう私も、大人になった現在、より自発的な、より自由な形で、いろいろな人、かずかずの本から絶えず教育を受け、それを楽しんでいる。

無数の可能性を潜在的にもっている人間の、その可能性をせまくしぼってゆくという教育の一面に、いまだに私は恐怖を感じ得ないが、人間の知恵は教育にもまた、多元性を可能にしつつある。ただひとつの生きかたではなく、多様な生きかたの価値を、それぞれに育て得る教育、それを可能にする社会、それはそれでお先真暗であることに変わりはないのだが、私の幻想はともすればそんな方向に傾く。

II

幼児教育ということを考える上で、いちばんたいせつなことは、自分が幼児だったころのことを思い出してみることと思うのだが、残念ながら幼児だったころの記憶は、そう鮮明なものではない。これはだれにとっても同じだろう。私が覚えていることの一つは、母が死にはしないかという恐怖である。一人っ子で、おまけに母親っ子であった私は、ちよつと母の帰りがおそいと、もう壁に向かってめそめそするような子だった。繰り返し母がいなくなったあとの自分を空想し、そうなったあと、どうやってひとり生きてゆけるかを、子ども心に思い悩んでいた記憶がある。

いつごろだったかはさだかではないが、母がいなくても自分は生きてゆけると思い始めたのが、私のおとなへの第一歩だったと言えると思う。そういう変化は何によってもたらされたのだろうか。私自身にもよくわからないが、それは少なくともいわゆる教育によってもたらされたのではないように思う。私はミッションスクール系の幼稚園に通ったが、そこでの最も強い記憶は、天国と地獄の掛け図である。死者が天使によって、生前の善悪をはかりで量られ、善にはかりが傾けば天国へ行けるが、悪にはかりが傾けば地獄へ落とされるといふその図は、どういうわけか生々しく今も私の心に残っている。これは明らかに教育だったであろう。それはあまり好ましくない教育だったように思われるのだが、ではもしそういう掛け図を見せられなかったら、今の私がどう変わっていたか、それを想像することも私にはむずかしい。

親や先生から受ける狭義の教育以外にも、子どもをおとなへと教え育てるものは数多い。子どもは兄弟姉妹からも教育されるし、友だちからも教育される。絵本やテレビによっても教育されるし、世間もまた子どもを教育する。子どもを取り巻く環境そのもの、時代と社会そのものが子どもを教育すると言ってもいいだろう。言うまでもないことだが、幼稚園や学校での狭

義の教育は、そういう広い意味での教育のほんの一部分にすぎない。そこでたとえ理想的な教育が行なわれたとしても、その「教育」は私たちの生きているこの矛盾に満ちた混とんたる現実を、その文脈として持たざるをえない。

その混とんたる現実には、たえず動いている。一般的に言って今、私たちが生きている社会に、よりよく適応するように子どもを教育しようと私たちは考えているが、同時にその社会を私たちの未来において変革し、動かしてゆくものもまた、子どもたちなのである。私たちが自分の型にはめて子どもを教育すればいいのなら話は簡単だけれど、実際は私たちは自分たちと同じような人間に子どもをしたいとは思っていないだろう。私たちは、ほんとうは子どもを、自分たちを超えた人間に教育したいのではないかと思う。

今の社会が理想社会だと思っている人は数少ないだろう。とすれば、今の社会に適應しない人間に教育することで、今の社会をより理想に近い形に変えてゆく人間をつくるということも考えられるのだ。教育という行為の最もむずかしいところはそこだろう。教育する主体の側が立ち止まっていることは許されない。特に生態学的観点から、人間文明のありかたを再検討することを迫られているこの時代の地球にあつては、教育する人間の未来への論理は、子どもの未来の生死にかかわることとして問われている。

幼児期における教育が、一人の人間をどこまで左右しうるのか、それは私にはわからない。よほど画期的な科学的方法でも確立されぬかぎり、私は狭義の「教育」より、社会や時代がもたらす広義の教育の力のほうが大きいのではないかと思っているが、そう考えるとすると、私たちすべてが知らず知らずのうちに、子どもたちに対しては教育者の立場に立っていることになる。そう自覚するのは、私にとっては何よりもまず、おそろしいことだ。

母の死の恐怖を克服する力を私に与えたものが何であったか、私には名ざすことができないが、それを私が自分ひとりで得たのだと考えるとすれば、それは、傲慢というものだろう。意

識にも記憶にも残ってはいないが、私はやはり、特定の個人ではなく、人間そのものにそう教
育されたのだらうと思う。

(一九七二)

「前提として」

人間はもう滅亡してもかまわないのだと説く人もいる。これ以上、地上を荒しまわるよりも、
むしろ滅亡の方向に向かうほうがいいと説くその人も、人類の絶滅を願っているのかといえ、
やはりそうとも断言はできないだろう。その人はその人なりに人間を愛している心情の反語的
な表現が志向しているところは、人間が人間とは何者かと考えているその通念の破壊だろうと
思う。常に向上を願い、常に進歩を望んでやまぬ人間のたどって来た筋道に、ひとつの転換が
必要であることに、私たちの大部分が気づき始めている。その転換は単純なUターンであって
はならないし、そんなことが不可能なのは分りきったことであるからこそ、私たちの混乱と恐
怖は大きい。人間は滅亡していいのだというような表現が、私たちに妙な安心感すら与えてく
れる、そんな時代に私たちは生きている。

だが本当に人間は滅亡していいのだと思えば、まずその言い出した本人が自殺してしまうだ
ろう。そんな烈しい言葉を吐きながら、なお自分にふさわしい生きかたを求めて生きつづける
のが人間であるなら、自分の信ずるものに殉じて、自らの生命を捨て、人間のより良い未来の
ためのいけにえとなることを辞さないのも人間である。個人の自殺すら人類の滅亡につながる
どころか、かえって生きつづける者への無言のはげましともなり得るので、そこに個人を超え
た人間という群棲動物の存在する意味があり、また自分をとおして、人間というこの分りにく
い考えを求めていくことの意味もある。

何がなんでも生きのびてやろう、たとえ卑怯未練と思われても生に執着しよう、そこにこそ

生きることの値うちがあるという考え方を、私は必ずしも絶対であるとは思わないが、同時にいつ、なんのためになら、すすんで自分の生命を投げ出すかと問われても、その答が容易に自分の内部から出てくるとは思えない。死に場所を得るということが、生きることの意味をいっそう明らかにするのを私は信ずるが、その死に場所を選ぶのはあくまで個人個人の勝手であり、個人を超えた人類は、全体として生存への意志を常にあからさまに持っているといっていだろ。その盲目的な意志そのものが生命の中心であることは、アメーバも人間も変わりはないので、生物界に時折見られるという集団自殺のごときものも、結局は種の保存を目的とする本能的行動であり、たとえ未来はどうあろうとも、人類は生きつづけようと努めるのだという事実は、どんなに人生を呪詛する個人も否定することのできぬ大前提である。

人類が自らの環境を破壊しつつあり、自らの棲息する遊星上の生態系にとり返しのつかない混乱をひきおこしつつあるという認識は、ここ数年の間に急速に一般的なものになった。新聞紙上などに報道される、表面に現われた個々の具体的問題においては、私企業の利益追求の過程における人間無視や、政治責任者の無策が攻撃されることが多く、ひとつひとつの問題の現実的なありようの中で、加害被害の責任は当然追求さるべきものだけけど、基本的にはこれは現在地球の大半を支配している西欧的な価値観にその基礎をおく文明そのものに内在している問題であって、私たちは巨視的に見れば被害者であるとともに加害者であることを認識せずにはいられない。

その原因は、遠く私たち人類が火というものを手に入れたこと、あるいはたとえそれが未分化なものであれ、言語によって世界を認識するようになったことにまでさかのぼることが可能であって、そこからある人びとは性急に人間の文明そのものをまで否定しようとするけれど、そのような方向での解決へのアプローチは、人間を直立以前の哺乳類に還元し、人間を人間たらしめている一切を無視することになりかねない。テクノロジーを制御するものが、今のところ

ろより高度なテクノロジー以外にあり得ぬことを私たちはまず勇気を持って直視するべきだろう。私たちが曲りなりにも人類という意識を持つことができるのは、通信交通手段の発達をぬきにしては考えられないし、生態系の危機を認識できたことがすでに、科学のひとつの成果にほかならないのである。

たとえば海は一国がこれを占有できるものではなく、海洋汚染の問題は当然各国間の協力なしでは解決できない。生態系は一地方で完結することなく、地球上のあらゆる所にまでいりくんだ網の目として存在している。かつて私たちは国家間の戦争をなくし、地球上の人類をひとつに団結させる契機として、宇宙内のほかの星の生物からの地球攻撃を夢見たこともあった。今、私たちはそのような異常事態を待つまでもなく、全地球規模での人類の意識の変革を必要としている。しかもその〈人類〉は決して均質な集団ではない。

一方で最新の医薬による奇型発生が問題になっているかと思えば、他方にはいかなる医療も望めず高い死亡率を保っている人びとがいまだに存在している。一方で腐敗し投棄される食糧があるかと思えば、他方に慢性の飢餓がある。しかも〈文明〉は、その人びとに恩恵をほとんど与えないや、彼らに新しい災厄をもたらす危険を秘めているのだ。

二十世紀の文明世界に住む私たちは、そのような認識を、一人一人の魂の内部で受けとめ、日々の生活の中で、それがいかに小さなものであろうとも、未来に向かっての決断を積み重ねてゆかねばならぬ立場にある。人類が集団として一体化を深め、一個の運命共同体に近づけば近づくほど個人にはより大きな、より重い責任が生まれてくる。つい数百年前までは、家族の中の自分は、せいぜい一村落の中での自分を考えるだけで足りたが、それが瞬く間に国家の中の自分を考えることに拡がり、今や私たちは、否が応でも人類の中の自分を考えざるを得ない。と、そう抽象的にいくこともはばかられるほどこれは一個人にとっては困難なことなのである。

私自身は日本語で詩らしきものを書くことを業としている人間である。そういう一種の架空

なものを創る人間としての私には、狂気や死までをも含むあらゆる反社会的、反人間的行動を行なう自由がある。通常の人間社会において相応の罰を受けることを前提としたうえで私はその自由を自分に認める。が同時に私は二児の父親であり、一市民として日本の政治に参加する権利も有している。そこでの私は人情の自然として、より良い人間世界を自分の血を継ぐ者たちに残したいと考える。そしてその方法においては、可能な限り他者を犠牲にしたくない。すべては気の遠くなるような迂路をとらねばならぬことばかりだが、この巨大な人類を動かすのも、私たち一人一人の個人においては無いのだということも、あまりにも自明の理である。

しいたげられた人間にとっては、自分の欲望を解放することこそが、自由への途なのだが、私のように幸運な人生を送ってきた人間には、少なくともこれからは自分の欲望を抑制していくところにしか、自由への途はないのではないかと私は思っている。それがどんな形ででも逃避につながってはならないことはもちろんだが、あたかも逃避であるかのような姿の内部にかえっていきいきと多忙な精神を保つことが可能なのも、この時代の逆説のひとつだろうと思う。私の主要な方法は日本語によっていて、その言葉の中で、詩人らしき私と、市民である私が一個の人間として生きられることを願う。道具としての科学、道具としての政治を新しい方向へと屈折させる思想は、なんらかの形での宗教的な観念の再生のうちに求められるだろう。詩は言語の改革をとおして、人間にふたたび聖なるものの所在をあかさねばならない。そのための犠牲を、私は払わねばならぬだろう。

(一九七一)